

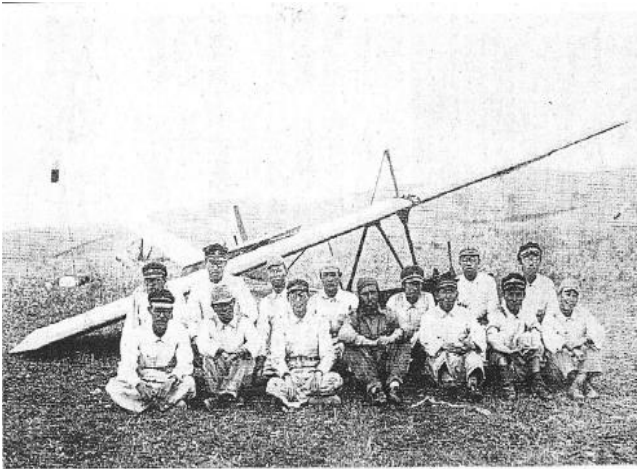
新聞記事になった故牧野鐵五郎先輩

昨年7月頃、毎日新聞京都支局S記者から「牧野鐵五郎さんのことを取材しているので話を聞きたい」という電話を受けて、二時間ほど取材に応じた。内容は8月15日終戦記念日前後によく取り上げられる戦争関連のものであった。奇しくも一周忌直後のことであったこともあり、掲載された記事をここに転載する。

(第3種郵便物認可)

毎 日 新

グライダー



特別操縦見習士官当時の牧野鐵五郎さん（牧野さんの手記「私の航空70年史」より）

は大きく、生涯をグライダーにささげる第一歩となった。
ライト兄弟の初飛行（1903年）以来、航空機の発達はめざま

ど関西勢も続いた。今では想像しにくい。当時の大学航空部はグライダーばかりか、エンジン付きの飛行機も操縦。牧野さん

12月に繰り上げ卒業し、陸軍入隊。2週間後には日本で唯一のグライダー部隊・滑空飛行第1戦隊（茨城県）に特別操縦見習士官として配属された。全国の学連支部などから選抜された約100人が集まった。
グライダー部隊は第二次大戦初期、ドイツ軍が奇襲作戦で成果を上げたことに刺激され、日本でも創設が急

特攻用機で

バリと機関砲を撃ち、手りゅう弾を投げ、敵機に爆薬を付けて回る——というものだ。
特攻要員には特別メニューの食事が用意され、「豚のように肥らせるだけ肥らせて殺すつもりか？」と冗談も飛んだ。だが沖繩出撃を翌日に控えた8月15日正午に玉音放送が流れ、隊員の心を虚無感が襲った。GHQ（連合国軍総司令部）は敗

「当時の教官には予科練帰隊など戦争体験者が多かったが、牧野さんが限らず戦争の話は意識的に避けていた。平和のスポーツとして育てていこうという決意があった」という。
その牧野さんは80歳を過ぎてパソコンを覚え、せきを切ったように体験を書き続けた。
「どのように読まれるかは別にして、太平洋戦争に参加した一人の日本人がどのようにあの大きな荒波を経験したかを私なりに書きつづつた」と手記を結んだ。愛弟子の元同志社大航空部監督の窪田昌三さん（76）＝大阪府吹田市＝は「空と一体になるグライダーは精神性の高いスポーツです。純粋に空を愛した若者が武器としての操縦かんを握る。強い葛藤があったのでしようね」と、師の心情に思いをはせている。

●発足間もない1937年8月の霧ヶ峰合宿に参加した同志社大航空部のメンバーら。まだ戦争の影もあまりなく、若者らは純粋にグライダーを楽しんだ。牧野さんはまだ入部していない（同志社体育会航空部50年誌より）
●牧野さんが訓練に明け暮れた軍用グライダー「クー-8」。機首がぱっくりと開き、機関砲を装着した四輪駆動車を積み込める（滑空史保存協会提供）

現在、多くの若者たちが自由に平和の空を楽しむ。その礎を築いたのは、戦争で一度は翼をもがれた先人たちである。【榊原雅晴】

毎日新聞京都版の紙面 1/2 を占めるものを、二ページに分割して掲載したので、字が小さくなって読みづらいが、ご辛抱頂き、こちらのページから左ページへと新聞と同じように読み進んで下さい。

にささげた生涯

1940(昭和15)年7月、信州・霧ヶ峰高原。同志社大予科に入学したばかりの牧野鐵五郎さん(当時19歳)は生まれて初めてグライダーの操縦席に座った。引っ張ったゴム索の反発力で飛ばす「パチンコ」と呼ばれる初級練習機で、飛んだといっても地面からせいぜい高さ20〜30m。大地を蹴ってフワッと空に飛び出した感激

17年平和考 京都 5

1940(昭和15)年7月、信州・霧ヶ峰高原。同志社大予科に入学したばかりの牧野鐵五郎さん(当時19歳)は生まれて初めてグライダーの操縦席に座った。引っ張ったゴム索の反発力で飛ばす「パチンコ」と呼ばれる初級練習機で、飛んだといっても地面からせいぜい高さ20〜30m。大地を蹴ってフワッと空に飛び出した感激

戦争とスポーツ

17年平和考 京都 5

空を愛した若者の葛藤

も霧ヶ峰の約1カ月後には軍払い下げの練習機で訓練を始め、翌年8月には単独飛行を許されるなどめきめ腕を上げていった。

純然たるスポーツとして始まった学連の飛行訓練だが、戦時色が濃くなるにつれ軍の影響が強まった。でなければ「ガンリンとかいろいろの資材が手に入らなくなり、好むと好まざるにかかわらず、その方向に進まざるを得ない有り様だった。学徒出陣で43年

戦国の航空活動をすべて禁止、学生のグライダーも残らず燃やされた。

出撃前日に終戦

がれた。爆撃機で大型グライダー「ク18」(全幅23・2m、搭載兵員20〜24人)をえいだが自力で飛べないグライダーは制空権がないければ生きて帰れない片道兵器。戦争末期の操縦士は「1作戦1回限り」とみなされた。45年7月、全員に特攻志願の有無が聞かれた。牧野さんは「熱烈希望」。その作戦とは、機関砲を装着した四輪駆動車と兵隊2人を乗せた「ク18」で敵飛行場に強行着陸、バリ

サンフランシスコ講和条約発効後の52年夏、学連が再開され関西の10校による合宿が玉水滑空場(木津川市)であり、牧野さんも教官として参加。7年ぶりに取り戻した翼で若者と天空を駆ける喜びを味わった。以後、昨年5月に94歳で亡くなるまでグライダー界の長老として後進の活動を見守り続けたが、自ら戦争体験を語ることはなかった。関西学院大航空部の戦後1期生、亘理一省さん(83) 神戸市東灘区